



## 卓 話

予防といわれている。症状が出てから診断されたのでは手遅れであることが少なくない。健康は自分で守るということを自覚することが重要である。がんは転移するから怖いので、転移する前の限局性の病気の段階で手術的に摘除することが大切である。

がんの治療は手術が基本であるが、昔とは異なり“患者さんにやさしい医療”が主流になってきた。拡大手術ではなく縮小手術が主流であり、患者さんにとって楽な内視鏡手術や腹腔鏡手術が盛んに行われるようになってきた。化学療法の進歩も著しく多数の有効な薬剤が開発されている。遺伝子検索の成果を臨床に取り込んで、いわゆる1人1人の患者さんに最も相応しい治療—個別化医療、オーダーメイド医療が可能になる日が近づいている。イレッサのような分子標的剤と呼ばれる新しいタイプの薬剤も登場し、今後この分野での発展が大いに期待されている。放射線治療の進歩も著しく重粒子線治療もスタートした。遺伝子治療、免疫療法も今後臨床の場に利用される日が近づきつつある。

最新の治療法を活用しても、すべてのがんを完治することは難しい。その場合は“がん共生”することを目的とした治療法が選択される。休眠療法と呼ばれる抗がん剤の投与などで、これが可能になりつつある。がんとともに天寿を迎える、いわゆる“天寿がん”の思想も紹介したい。高齢化とともに、がんに罹ることはある程度運命づけられているともいえるが、時間はかかるが予防することも可能である。これを2次予防に対して1次予防という。予防で一番重要なのは禁煙であり、次に食事に関する注意、そして運動の励行である。

以上の話を通して、がんに対する心構えを新たにしていただければ幸いである。

### 「がんで死なないために」 癌研有明病院メディカルディレクター 名誉院長 武藤 徹一郎氏

人間の体には60兆の細胞があり、その細胞の中にある核の中に生命の起源であるDNAが存在している。このDNAは30億の塩基と呼ばれる化学物質から成っており、塩基が何千個も集って遺伝子を形成している。遺伝子の働きによってタンパクが作られ、その動きの差によって細胞の性質も異なってくる。ヒトの遺伝子は3万ないし3万5千あると考えられている。



がんはこの遺伝子の異常によって起こる病気であるが遺伝病ではない。がんに関係する遺伝子は約300種類あり、複数（10個位）の遺伝子異常が蓄積してはじめて完成されたがんになる。一般に加齢とともにがんが発生する確率が高くなるので、がんは長生きの税金のようなものである。

国によりまた日本では県により、がんの死亡率が異なる。がん死亡率の一番低いのは沖縄県、高いのは秋田県で石川県は24位である。わが国では昔から胃がんが多かったが、最近減少傾向にあり、最近では肺がん、大腸がん、乳がんが増加している。欧米ではほとんどがんの罹患率、死亡率が減少しはじめているが、とくに米国では政府主導による予防、検診への努力の結果であると考えられている。

一般の人々はがんは死病と考えているようであるが、これは間違いである。一部のがんを除いて、早期に発見すればがんは治癒する病である。早期発見には検・健診しか方法はない。これは、がんの2次